

戦時中国における鄒韜奮の政治活動

楊 韜

0 はじめに

本稿は、ジャーナリスト鄒韜奮の政治活動について検討する試みである。一貫して無党無派を標榜してきた鄒韜奮は言論人であり、彼が政治家として活躍した時期は短い。1938年、鄒韜奮は国民政府によって国民参政員として招聘され、1941年まで国民参政会での提案と論議に参加した。彼の本格的な政治活動は、この約2年間という短い期間に行われたものである。以下、まず鄒韜奮の国民党と共産党に対する態度を検討したうえで、1938年から1941年にかけての彼の国民参政会での活動を考察する。さらに、彼が「左傾」と言われた背景について、国民党の生活書店への迫害と共産党「地下党員」による浸透という二つの側面から検証を行う。このような分析を通して、戦時中国における鄒韜奮の政治活動の背景及び具体像を明らかにする。

1 国共両党に対する態度：1936年の声明文から読み解く

日中戦争期の生活書店の出版物における投書欄には、しばしば当時の国民党政府と延安の共産党根拠地政権の関係についての投書が掲載されている。たとえば、ある父親からの「一人っ子の息子は陝西省へ行った」という手紙の中に、八路軍が作った抗戦大学は（国民）政府の許可を得ているのか、というような質問がある。さらにその読者は「国共合作（国民党と共産党の連携）が実現しているが、隠れて見えないところでは摩擦はある」¹と書いて、時局への心配ものをぞかせている。また、『抗戦』第69号（1938年5月6日）には前線兵士からの手紙が掲載された。この読者が伝えたのは、某雑誌では国民党と共産党のかつての怨念についての文章が多くあったという情報であった。この読者は、全国一致して抗戦しなければならないこの時期に、このような文章を掲載する雑誌を批判した。それでは、一貫して無党無派を標榜してきた鄒韜奮の国民党、共産党との関係はどのようなものであったのだろうか。彼から見た国民党や共産党とはどのような政党であったのかを改めて検討する必要がある。この問題については、1936年に鄒韜奮が沈鈞儒、章乃器、陶行知と連名で『生活日報』第55号（1936年7月31日）で発表した「団結御悔的幾個基本条件与最低限要求（団結して侵略に抵抗するいくつかの基本

条件と最低限要求)」という声明文のなかで詳しく論じられた。鄒韜奮はこの声明文を通して、何を表明したかったのか。筆者は次の四つの要点を読み取ることができる。

第一に、鄒韜奮が中国革命における国民党政権のヘゲモニーを認めている点である。国民党に対する希望について論じた時、鄒韜奮は「われわれは中国国民党が中華民族革命の歴史上の主役であると終始一貫して認めている」²と書いている。鄒は清王朝や袁世凱独裁政権を倒し、北洋軍閥を覆したのは国民党であると評価したが、共産党が提起した「聯合抗日」の主張に対する国民党の沈黙に溜息をついた。そして、国民党に対する希望として、次のように述べている。

われわれが希望するのは、民族革命の光栄の歴史を持つ国民党、中国政治権を握る国民党が、早く行動して救国聯合戦線を形成することである。(中略) 今共産党が「聯合抗日」の主張を提起したが、国民党は何の意向表明もない。そうすると、一般民衆はかえって共産党が大局的な見地に立ち、既成の観念を打破したと信じるため、国民党にとっては大変不利である。³

これを読むと、鄒韜奮は国民党が政権党であることを強調しているようにさえ感じられる。鄒韜奮は国民党政権における問題及び国民大衆からの反感をはっきり認識していたが、革命の歴史のなかで生まれた国民党の合法性、正統性を客観的に認めている。そのためには、国民党が抗戦における主役としての力を発揮してほしいと、国民党の改革と変化に期待していた。このような期待感は、この声明文が出された1936年の時点においてははっきりと表れていた。

後に国民参政会での活動が挫折したことや生活書店の事業における被害などから、鄒韜奮の国民党に対する期待は次第に薄れ、最終的には失望に終わった。しかし、国民参政員を辞任し香港へ逃れた鄒韜奮は、1941年4月9日『華商報』で「全面抗戦を發動する基本条件」を発表した。そのなかで彼は「われわれは政府と指導者を擁護し、それに国民党を愛護する態度を前提として、国事に関する主張や意見を述べている」⁴と発言したように、1940年代以降の鄒韜奮は左傾化と見られたが、1941年の時点においては、国民党の政権における主導権を認めることに変化はなかった。すなわち、1936年の『生活日報』における声明文から、1941年の『華商報』における声明文まで、国民党政権のヘゲモニーを認める態度には変化はなかったのである。

第二には、鄒韜奮は共産党の存在と成長に関心を持ち続けたが、武力闘争による階級解放には反対であったという点である。鄒韜奮の共産党に対する認識は、彼の理解している社会主義と緊密な関係があると考えられる。筆者は、鄒韜奮が書いた文章の検証を通して、彼が認識している「社会主義」と中国共産党が主張する「社会主義」は必ずし

も一致していなかったと考える。むしろ、1930年代初期に鄒韜奮が考えていた「社会主義」は孫文の「民生主義」に近いものであったと思われる。鄒韜奮はかつて『生活』第6巻第49期（1931年11月28日）で「中山先生（孫文）の平和的政治方法によって社会主義を実現する主張を擁護する」⁵と書いている。1936年の声明文からも、鄒韜奮は共産党の階級闘争運動に反対していたことが読み取れる。彼は、共産党の「聯合抗戦」の主張を評価しながら、次のように述べている。

紅軍の占領地では、富農、地主、商人には寛容な態度をとるべきだ。大都市では、抗日の力を弱める労資（労働者と資本家）の衝突もできる限り避けるべきだ。（中略）抗戦の集会やデモの際に、わざと階級対立のスローガン、国民党や国民政府に反対するスローガンを叫び、聯合戦線に害を与えている思想の幼稚な青年がいる。こういう行為は、共産党の指示によるものではないと信じるが、共産党内部の左傾幼稚な青年の個別的な行為によるものかもしれない。⁶

引用文のなかに挙げられた現象に対して、鄒韜奮はすべて反対であるとし、また共産党と関係がある人物や事件であるのならば共産党に叱責と改善の責任があると主張している。鄒韜奮が武力による階級闘争に反対するのは、彼の一貫した平和的手法を用いる改良主義からくる考えであることは言うまでもない。また、抗日戦争期という特殊な時期において、彼が最も恐れていたのは、階級闘争による打撃が聯合戦線の分裂に及ぶことであった。すなわち鄒韜奮は、農村部の富農や地主、都市部の商人や資本家も抗戦の力の一部とみなしており、彼らに対する階級闘争が抗戦の力を弱くしかねないという意見をもっていた。これは、次の第三のポイントとつながっている。

第三には、抗日戦争期には党派の区別より統一戦線の形成こそが第一の任務だと考えていたという点である。鄒韜奮は、抗日救国はすべての人力、財力、そして全民族の知恵の集合によって最終的な勝利を得られると考えていた。彼は、「抗日救国という大事業は、決して単独の政党や派閥、単独の個人ができることではない」⁷と述べている。さらに、聯合戦線の前途を心配している人々に対して、鄒韜奮は次のような仮説を説いた。

抗日救国が完全に勝利した後も、この人民の大団結が必ず分裂するとは思わない。各党派が同じ戦線で、共同で奮闘してようやく共通の勝利を得られたから、苦難をともにした友になったわけである。もともと了解できない多くのことも、了解できる。今まで異なった主張も一致することができる。⁸

鄒韜奮のこのような発言は、全国国民の抗戦意識を高揚するためのものであったのか。

歴史的には、彼のこのような仮説は1940年代末の内戦によって成立しなかったが、国家の独立そして安定した政権による新しい出発への願いがはっきり読み取れるだろう。

第四には、ジャーナリストの鄒韜奮にとって、理想的な言論人は無党無派の立場に在るべきだと主張した点である。『生活』の編集を担当していた頃から、鄒韜奮は自分が特定組織に属さない無党無派の言論人であると表明し続けた。彼は、『生活』第7巻第40期（1932年10月8日）で「関係ない帽子」という記事を書いた。当時、鄒韜奮にはいくつかの噂が立っていた。つまり、彼は存在しない「国家社会党」や「労働社会党」などに参加し、「左傾作家」になったという噂である。それに対して、鄒韜奮は「記者（私）は独立の立場で雑誌を作っている、個人としてもいかなる党派という帽子も被ったことはない」⁹と述べている。また、1944年の死の直前に書いた『患難余生記』のなかでも、国民参政会での発言「私は自分が国民参政員であり、国民党员ではなく、共産党员でもないと言った」¹⁰ことに言及した。

以上のように自身の立場（国民党でも共産党でもない中間勢力）を表明してきた鄒韜奮だが、死の直前に共産党への入党を申し出た。その理由はどのようなものだったのだろうか。筆者は、主に以下の二つが挙げられると考える。第一に、1940年代初期以降の国民党政権による生活書店への破壊活動、そして第二に、1930年代から密かに始まった共産党による生活書店に対する浸透活動（工作）が挙げられる。この二点について具体的に検討していきたい。その前に、まず鄒韜奮が国民参政会においてどのような政治活動を行ったのかを把握しておく必要がある。

2 言論出版自由のための戦い：国民参政会での提案について

鄒韜奮は1938年6月に国民政府によって招聘され、1941年2月の辞職まで、約2年間にわたり国民参政員を務めた。その間、鄒韜奮は国民参政会第一屆第一回大会から第五回大会に出席し、主に言論出版に関する提案を数多く提出し、言論出版の自由をめぐる戦いを続けた。国民参政会は国民政府によって設立され、国民党・共産党及びその他の抗日党派と無党派人士の代表を包括する全国最高の諮問機関である。国民参政会は名義上、政府の施政方針に対する議決権、政府報告の聴取、諮問・提案権をもち、後には政府委託事項調査権・国家総予算の第一審議権が加えられた。しかし、その決議はどれも必ず国防最高会議の批准を経なければ、関係部署で実施することができなかった。¹¹このような「諮問機関」は、明らかに国民党の支配下に置かれるものだが、清末までの封建専制制度、そして民国初期以降の軍閥政権に比べると、「抗戦時期の国民参政会は形式から内容まですべてに一定程度の進歩があったことを認めざるをえない」。¹²国民参政会の形式について、鄒韜奮は「請客、来賓、陪客」の表現を用いて喩えている。¹³「請客」

はすなわち、国民参政会は国民政府によって設立されたものであり、そこでの参加者は国民党側が作ったリストによって招聘された人々であるため、「請客」と呼ばれる。「来賓」はすなわち、招待された人々であり、具体的には共産党（陳紹禹、董必武、林祖涵、鄧穎超ら）・青年党（曾琦、左舜生ら）、国家社会党（羅隆基、徐傅霖）、第三党（章伯鈞）、職業教育派（黄炎培）、村治派、教授派などを指す。「陪客」は無論国民党である。

国民参政会において、鄒韜奮は主に戦時下の言論出版の自由をめぐる複数回にわたり提案した。彼が出した「提案」は以下の表1のとおりである。

表1 国民参政会における鄒韜奮の「提案」一覧

| 提案会議 | 開催期間・開催地 | 提案題目 |
|----------|---------------------------|--|
| 第一屆第一回大会 | 1938年7月6日～ 15日・漢口 | ①『調整民衆団体以發揮民力案』、②『具体規定検査書報標準並統一執行案』、③『改善青年訓練以解除青年苦悶而培植救国幹部案』 |
| 第一屆第二回大会 | 1938年10月28日～ 11月16日・重慶 | 『請撤削圖書雜誌原稿審查辦法、以充分反映輿論及保障出版自由案』 |
| 第一屆第三回大会 | 1939年2月12日～ 21日・重慶 | ①『請撤削增加書籍印刷品寄費、以便普及教育增強抗戰力量案』、②『動員全国知識分子掃除文盲普及民族意識以利抗戰建国案』 |
| 第一屆第四回大会 | 1939年9月9日～ 18日・重慶 | ①『嚴加肅清汪派売国活動与漢奸言論案』、②『改善審查搜查書報辦法及實行撤削增加書報寄費、以解救出版界困難而加強抗戰文化事業案』、③『請政府重申前令切實保障人民權利案』、④『請政府明令保障各抗日党派合法地位案』（陳紹禹提案）に署名 |
| 第一屆第五回大会 | 1940年4月1日～ 10日・重慶 | 『嚴禁違法拘捕、迅速實行提審法、以保障人民身体自由案』 |

出所：『韜奮年譜』に基づき、筆者作成

以上のほぼすべての「提案」は当時の言論出版政策に関するものであるが、なかでもとりわけ第二回大会にて提出された『請撤削圖書雜誌原稿審查辦法、以充分反映輿論及保障出版自由案』は注目に値するものである。この提案の背景としては、1935年の「新生事件」以降の国民政府による「出版法」の改正に遡る。¹⁴ 提出時の状況について、鄒韜奮は以下のように回顧している。

記者（＝鄒韜奮）は開会前から、多くの言論界と出版界の友人からお便りを頂いた。皆さんから、この提案を出すように催促された。そして実際の提出にあたり、74名の参政員の署名を得た。したがって、これは決して記者一個人の意思だけを表明した提案ではないと深く信じている。¹⁵

この提案の署名欄には、様々な党派の人物の名前が見られる。たとえば、共産党の陳紹禹、董必武、林祖涵、鄧穎超などのほかに、沈鈞儒・史良・章伯鈞などの第三勢力の著名人が名を連ねている。また当時、国民党機関紙『中央日報』の社長であった陳博生の名も並んでいる。この提案が多くの党派の参政員からの同意を得て提出されたのには、その主張内容と関係がある。中村元哉は以下のように述べている。「本提案は事前検閲と事後検閲から成る検閲（「審査」）システムの全廃を求めていたわけではなく、戦時の必要性に配慮して、事後検閲を容認していた。つまり、当時の出版関係者が問題視していたのは、検閲基準が曖昧な状況下での事前検閲のあり方であった」。¹⁶つまり、当時の戦時状況を配慮し、出版関係法律の全面改正ではなく、事前検閲のあり方に重点を置き、その改善を求めるといって一点に集中したわけである。

鄒韜奮は第一屆国民参政会のすべての大会において「提案」を出した。これらの提案は、当時の言論出版界全体の状況を反映し、その要請を代言しているが、同時に鄒韜奮が経営する生活書店の境遇とも直接関係している。後述するように、生活書店は1938年以降国民党による激しい破壊を受け、甚大な被害を被った。上記の書籍やジャーナルの郵送に関する費用問題、出版業従業員の人身的被害に関する「提案」は、生活書店が実際に遭われた迫害への抗議や防衛策でもある。しかし、これらの提案は、国民参政会にて採択はされたものの、実施に移されることはほとんどなかった。鄒韜奮の国民参政会に対する認識や態度も徐々に変化していった。国民参政会初期において、鄒韜奮は以下のように期待感を述べている。

国民参政会の設立初期において、国民参政会が民意機関として看做されるかどうかについて多くの争議があった。国民参政会の職権は各民主国家の国会に及ばないが、「国民参政機関」である以上、決議・建議・諮問の職権をもち、うまく運営できれば、政治の改善に作用することはないわけではない。¹⁷

しかし、のちに鄒韜奮を含め、多くの参政員が国民参政会に対して苛立ちを感じるようになり、最終的には失望に落ちた。鄒韜奮は以下のように記述している。

一方、彼ら（＝参政員ら）の参政会に対する熱望が日々下降し、参政会の作用に関しても日々信用が失っていくことが見える。これは決して彼らの主観的な消極ではなく、この粉飾的役割しか持たない飾り物—国民参政会—について、今日になって、その実際の役割が全くないことがはっきり見えるからだ。もっとも重要な原因は、国民参政会は過渡期の「民意機関」として看做されたが、予備用の顧問に過ぎず、民意機関にあるべき職権を一切もっていないところにある。¹⁸

そして、自身の参政員経験について、鄒韜奮は以下のような表現で怒りをぶつけた。

印刷用紙を無駄にし、印刷インクを無駄にし、罪が極めて深い。これは、私がこれまでの国民参政会で得られたもっとも苦い教訓である。¹⁹

総じて言えば、鄒韜奮の国民参政会での活動は、初期の段階では期待感に満ちたものであった。彼は、毎回の大会において積極的に「提案」を提出し、言論出版自由を中心とした論議にも参加し、当時の中心課題である「憲政」への関与にも努力を惜しまなかった。しかし、提案は採択されても、実施に至ることはほとんどなかった。彼の期待と努力は、次第に失望へと変化し、最終的には自ら辞職する形でその絶望感を表明した。このような経過の裏には、先に言及した彼の国民党・共産党との関係に密接な関係がある。以下、具体的に検証していきたい。

3 国民党による破壊と共産党による浸透

まず、1940年代初期以降の国民党政権による生活書店への破壊活動及びその被害状況を見てみよう。

生活書店が受けた被害について、鄒韜奮は1941年6月8日から28日にかけて『華商報』に数十回にわたる連載記事を書き、詳しい記録を残した。その第一回の記事「逆流のなかの文化拠点」のなかで、彼は次のように述べている。

逆流のなかで破壊された文化拠点は、書店、新聞社、通信社及びほかの文化団体などがある。これから私が語る文化拠点はそのなかの一つである。私が語る理由は二つある。まずこれは代表的な例の一つとして挙げられる。そして、この文化拠点到私自身関与していることから、破壊された全過程について私は熟知している。それは、16年の輝かしい歴史をもつ生活書店である。²⁰

そして、鄒韜奮はこれから連載予定とする内容の概要をまとめた。すなわち、生活書店の精神とは何か、生活書店の抗戦期における貢献とは何か、生活書店が破壊された経過、生活書店を破壊する口実とは何か、そして当局に対する抗議などの防衛策や結果に至る経過などである。この連載記事によると、もともと全国各地にあった55の支店は国民党中央党部の指示により強制的に営業停止処分となり、書店の資産は没収され、最悪の場合には閉鎖されるといった事態に追い込まれ、最終的には重慶本店と海外支店しか残らなかったという悲惨な状況に陥った。(資料1参照)

生活書店に対する迫害の口実について、鄒韜奮の調査では、次の四つが挙げられた。第一は、禁書の販売である。第二は、共産党から援助資金をもらったことである。第三は、生活書店の同人自治会などが「政治活動」をしていた疑いがあることである。第四は、検閲された手紙のなかで、延安との通信があったということである。これらの口実、特に書店の運営資金に関しては、帳簿を調べられても何の証拠も出なかった。また、共産党との通信について鄒韜奮は、たとえ手紙の内容が違法であっても、書店職員の個人的通信と書店という機関としての通信との区別をしなければならないと主張した。

これらの口実のなかで、生活書店と共産党との組織的なつながりという疑惑は国民党政権にとって最大の懸念材料であっただろう。当時、生活書店と共産党の関係について最もよく言われていたのは、全国各地に点在する生活書店の支店が共産党八路軍の連絡拠点であるということである。これに対して、鄒韜奮は次のように反論した。

延安（辺区政府）は西安に公開の八路軍弁事処（事務所）がある。十八集團軍の弁事処は、戦時首都重慶にもある。これらの弁事処は通信などの事務を処理することができるため、ほかの機関が越権行為をする必要はまったくない。²¹

この鄒韜奮の反論を見る限り、生活書店と共産党には組織的な関係はなかったようである。しかし、実に1930年代初期から、すなわち1932年に生活書店が創立された当初から、生活書店の内部には共産党の「地下党员」が入っており、その後の「地下党员」による影響は大きかった。その代表的な人物は胡愈之である。

商務印書館で『東方雑誌』の編集に携わった胡愈之は、世界語（エスペラント）専門家として高名であるが、長い間彼が共産党员であることは知られていなかった。胡愈之は1933年に中国共産党へ入党したが、1979年までの長い期間にわたり党员の身分を公開しなかった。1979年まで、胡愈之は一貫して「民主人士」として活躍した。とりわけ、新中国成立までの民国期において、彼は始終「地下党员」として活動し、共産党組織とのつながりはすべて「単線联系（一方通信による連絡）」の形で行い、共産党組織と連絡を保ち、「地下活動」を続けていた。²² 胡愈之の共産党組織との「単線联系」については、彼の回想録に詳しい。（資料2参照）

胡愈之のような「地下党员」及び彼らの生活書店への浸透について、鄒韜奮が事態を把握していたかどうかは不明であるが、実際に鄒の近くで働いていた胡耐秋は、以下のように証言している。

当時の情勢は、国民党による「異党活動を制限する」という反動政策の下に置かれていた。たとえ生活書店のなかに共産党組織が存在していたとしても、当然それは

秘密のものであった。秘密である以上、生活書店のほかの同僚、書店のトップを含め、皆知らなかった。²³

生活書店の組織には、ほかにも数人の共産党員がいた。彼らは生活書店の経営に大きな影響をもたらした。この点について、鄒韜奮も主要メンバーとして所属した救国会と類似するところがある。田中仁（1990）が示したように、1930年代の救国会の組織は、上層人士によって担われた公開部分と中共党員がその中枢部分を掌握する非公開部分によって構成された統一戦線組織であった。²⁴生活書店には、鄒韜奮という「非国民党員、非共産党員」の中間勢力という大きな看板がありながら、組織的にはかなりの部分が共産党の「地下党員」によって構成されていたと考えられる。

1930年代末から、1945年にかけての共産党の文化政策について、高郁雅は次のように主張する。すなわち、一般的には、民間の新聞や雑誌が左傾化する現象に対して、共産党の出版業界に対する「浸透」が原因だと言われている。共産党側に民間の新聞や雑誌を左傾化させようとした努力があったのは事実であるが、それはこれらの新聞や雑誌の左傾化を促進した唯一の原因ではなかった。²⁵高郁雅によれば、新聞業界の自由度、新聞社の経営状態、各誌（紙）の読者層の選択や編集者の個性などは新聞や雑誌などの活字メディアの立場を変化させる多様な要素であり、共産党による「浸透」は諸要素の一つにしか過ぎず、雑誌や新聞を根本的に変化させることは不可能であるということである。しかし、高郁雅がこの問題を検証する対象として取り上げたのは『大公報』の一つだけである。生活書店のケースにおいては、共産党による「浸透」は極めて徹底的に行われたと考えられる。また、高郁雅が最初から『新生』、『大衆生活』、『生活日報』という生活書店の出版物を共産党系報刊として分類している点に関しては、生活書店を第三勢力として位置づける筆者とは根本的に異なることを改めて断っておきたい。

鄒韜奮が左傾化する原因には、前述したような共産党による浸透が挙げられるが、当時の知識人たちに共通した国民党政権に対する失望感、そして延安根拠地政権に対する期待感による影響も大きいと考えられる。『華商報』で連載した『抗戦以来』から読み取れるように、鄒韜奮の国民党政権に対する失望感は、1941年の国民参政員の辞任時にピークに達し、その後香港へ逃れた。

一方、当時の延安根拠地政権に対して、多くの知識人は期待感を高めた。フェアバンクが述べているように、「延安の中共の明るい生气と質朴な平等主義は、エド・スノウの『中国の赤い星』ですでに有名になっていた。マイケル・リンゼー、レイ・ルッデン領事、医療関係者など、すべての旅行者がこの印象に裏付けを与えた。延安は遠くて輝いた」。²⁶また、平和的手段による改良主義を主張する鄒韜奮にとっても、この時期の延安根拠地政は一時的な変化を見せていた。

延安の政治機構は、最初はソビエト体制であったが、国共合作と同時に、ブルジョアの機構が採用されるようになった。三・三制の実施をはじめ、地主・資本家の公民権の保障、国府の官制・軍制の準用にもとづく機構改革、三民主義による政治指導など、ブルジョアの制度が大幅にとり入れられた。²⁷

これは、鄒のような中間層にとっては自分が目指している理念と近い「仮像」に見えたかもしれない。抗日戦争にあたり、国民党も共産党も、大衆的ナショナリズムの方向に舵を切った。鄒韜奮のような中間層は、国民党と共産党の双方が勝ち取りたい対象であった。このような攻防戦において、共産党の南方局、とりわけその責任者である周恩来の人格的魅力及び彼の綿密な統一戦線工作は大きな働きがあったと思われる。鄒韜奮は1938年2月に武漢で初めて周恩来と会った。それ以来、重慶では頻りに連絡を取り合っていた。生活書店にも周恩来を招いて職員との座談会を行った。周恩来の統一戦線工作について、以下のように述べられている。

そのほかの各党派の人々にたいしても、周恩来は密接な往来を維持した。ある時期、かれはほとんど毎週漢口の中央銀行ビルに行き、救国会の沈鈞儒、史良、鄒韜奮、李公樸、国家社会党の張君勱、青年党の左舜生らと集まって国の基本方針について討論し、かれらに国共交渉の状況を紹介し、政治情勢を分析するとともに時局にたいするかれらの意見を尋ねた。こうした日常的で率直な話し合いを通じて、かれらの共産党に対する認識をだんだんと深めさせ、そのなかのおおくの人々が以後中国共産党と長期の合作を行っていくうえでの基盤を築いた。²⁸

1939年以降、周恩来は鄒韜奮と彼が経営する生活書店に常に関心を払っていた。1941年に鄒韜奮が国民参政員を辞任し香港へ逃れたとき、周恩来は胡繩を派遣し、鄒韜奮が重慶を離れ桂林を経て、香港に無事到着するまで付き添わせた。太平洋戦争の勃発後、香港が陥落し、鄒韜奮ら多くの著名知識人が香港から広東省へ脱出した際にも、周恩来は幾度となく指示を出し、特別な配慮を払った。²⁹

4 おわりに

1938年、鄒韜奮は国民政府によって国民参政員として招聘され、1941年まで国民参政会において政治活動を行った。その間、鄒韜奮は国民参政会第一屆第一回大会から第五回大会に出席し、主に言論出版に関する提案を数多く提出し、言論出版の自由をめぐる戦いを続けた。しかし、提案は採択されたものの、実施に移されたことはほとんどな

かった。鄒韜奮が初期段階に抱いていた期待と努力は、次第に失望へと変わり、最終的には自ら辞職する形でその絶望感を表明した。平和的手段による改良主義を主張していた鄒韜奮は、武力的階層闘争を人民解放の手段とする共産党に対して、当初は否定的態度をとっていたが、国民党への失望から次第に理解を示すようになり、最終的には入党を求めるに至った。このように、国民党政権による破壊活動、共産党による浸透（時には支援ともいえる）活動、そして延安根拠地政権への期待感の高まりに押され、鄒韜奮は最終的には「無党無派」という立場から中国共産党へと転じたわけである。国民参政会での政治活動が行われたのは、鄒韜奮のジャーナリストとしての生涯においてごく短い期間に過ぎない。しかし、この時期における鄒韜奮の言動はまさに彼の人生の機微を反映したものであり、彼の国民党と共産党に対する認識の変化、または「左傾」となった原因及び背景を最も反映したものであった。

注

- 1 『韜奮全集』第8巻、54頁。
- 2 『韜奮全集』第6巻、712頁。
- 3 『韜奮全集』第6巻、713頁。
- 4 『韜奮全集』第10巻、176頁。
- 5 『韜奮全集』第5巻、86頁。
- 6 『韜奮全集』第6巻、714-715頁。
- 7 『韜奮全集』第6巻、707頁。
- 8 『韜奮全集』第6巻、710頁。
- 9 『韜奮全集』第5巻、482頁。
- 10 『韜奮全集』第10巻、863頁。
- 11 周勇（2004）、78頁。
- 12 同上。
- 13 『韜奮全集』第10巻、200頁。
- 14 「新生事件」について 拙稿（2008）参照。
- 15 『韜奮全集』第8巻、292頁。
- 16 中村元哉（2011）、78頁。
- 17 『韜奮全集』第9巻、29頁。
- 18 『韜奮全集』第10巻、768頁。
- 19 『韜奮全集』第10巻、295頁。
- 20 『韜奮全集』第10巻、324頁。
- 21 『韜奮全集』第10巻、903頁。
- 22 朱順佐・金普森（1991）、369-370頁。
- 23 胡耐秋（1979）、39頁。

- 24 田中仁 (1990)、303 頁。Stranahan (1998) 第五章も参照されたい。
- 25 高郁雅 (2004)、224 頁。
- 26 フェアバンク、J. K. (1994)、364-365 頁。
- 27 今堀誠二 (1973)、15-16 頁。
- 28 金沖及 (1992)、190 頁。
- 29 彭亜新 (2009)、117、173 頁。

資料

資料1 生活書店被害状況一覧（『生活書店史稿』205-214 頁に基づき、筆者作成）

| 支店名 | 被害状況 |
|-------------|--|
| 浙江・天目山臨時営業処 | 1939年3月2日営業開始、3月8日営業停止命令、3月11日閉鎖。 |
| 陝西・西安支店 | 1939年4月21日、捜査を受け、書籍1860冊没収、支店長逮捕、営業停止命令。5月末、全資産没収。 |
| 陝西・南鄭支店 | 1939年4月30日、捜査を受け、書籍498冊没収。5月4日、支店長逮捕、全店閉鎖、全資産没収。 |
| 甘肅・天水支店 | 1939年4月以降、度重なる捜査を受け、支店長と職員逮捕。 |
| 湖南・沅陵支店 | 1939年6月9日、捜査を受け、書籍500冊没収、代理支店長逮捕、6月16日、営業停止命令。 |
| 浙江・金華支店 | 1939年6月14日、捜査を受け、書籍約1000冊没収、職員逮捕、7月、営業停止命令。 |
| 江西・吉安支店 | 1939年6月15日、23日、捜査を受け、書籍数冊没収。6月29日、閉鎖。 |
| 江西・贛州支店 | 1939年6月15日、捜査を受け、書籍数冊没収。6月16日、営業停止命令。 |
| 湖北・宜昌支店 | 1939年6月17日、捜査を受け、書籍1423冊没収、職員逮捕。7月23日、営業停止命令。 |
| 浙江・麗水支店 | 1939年6月26日、捜査を受け、書籍数十種類没収、営業停止。 |
| 安徽・屯溪支店 | 1939年6月29日、営業停止命令。 |
| 広東・曲江支店 | 1939年7月8日、捜査を受け、書籍数冊没収、閉鎖。 |
| 福建・南平支店 | 1939年10月23日、閉鎖。 |
| 陝西・宜川臨時営業処 | 1940年2月3日、捜査を受け、支店長と職員逮捕。 |
| 湖南・衡陽支店 | 1940年2月5日、捜査を受け、職員11人逮捕、閉鎖。 |
| 安徽・立皇支店 | 郵便物の無断差し押さえ。1940年4月5日、隣店舗の火事を理由に職員逮捕。 |
| 四川・成都支店 | 1941年2月7日、閉鎖。 |
| 広西・桂林支店 | 1941年2月10日、閉鎖命令。 |
| 貴州・貴陽支店 | 1941年2月20日、閉鎖、支店長と職員逮捕、全資産没収。 |
| 雲南・昆明支店 | 1941年2月21日、閉鎖。 |

資料2 胡愈之と共産党組織の「単線連絡」状況（『我的回憶』に基づき、筆者作成）

| 年 | 「単線連絡」状況 | 出所 （『我的回憶』に おけるページ数） |
|------|------------------------------------|----------------------------|
| 1931 | 上海、沈雁冰家で、張聞天と初会、共産党に対する態度を探られる | 17 頁 |
| 1933 | 上海、張慶孚と知り合い、入党の希望を伝える。以降、連絡人となる | 25 頁 |
| 1934 | 上海、張慶孚 ⇨ 王学文 ⇨ 宣侠父 | 27 頁 |
| 1935 | 上海、宣侠父 ⇨ 嚴希純 | 30 頁 |
| 1935 | 11 月、嚴希純が逮捕され、連絡中断、香港へ、宣侠父と再会、連絡再開 | 33 頁 |
| 1936 | 上海へ戻り、ソ連へ、潘漢年 | 35 頁 |
| 1938 | 武漢、周恩来 | 48 頁 |
| 1940 | 桂林、李克農 ⇨ 香港、廖承志、シンガポールへ | 56 頁 |
| 1948 | 香港、方方 | 76 頁 |

文献一覧

<日本語（五十音順）>

今堀誠二『中国の民衆と権力』（勁草書房、1973）

金冲及主編『周恩来伝 1898-1949 中』狭間直樹監訳（阿咩社、1992）

周勇「抗戦時期国民参政会の研究」石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』（東京大学出版会、2004）：69-83

田中仁「国民政府時期、転換期の上海における中国共産党の組織と活動」『大阪外国語大学論集』1（1990）：293-318

中村元哉「解題」野村浩一ほか編『新編原典中国近代思想史 第6巻 救国と民主—抗日戦争から第二次世界大戦へ』（岩波書店、2011）：78

フェアバンク、J. K.『中国回想録』蒲地典子・平野健一郎訳（みすず書房、1994）

楊韜「「新生事件」をめぐる日中両国の報道及其背景に関する分析—差異と原因」『メディアと文化』4（2008）：161-176

<中国語（ピンインローマ字順）>

高郁雅『国民党的新聞宣伝與戦後中国政局變動（1945-1949）』（国立台湾大学出版委員会、2004）

黄炎培『黄炎培日記』（華文出版社、2008）

胡愈之『我的回憶』（江蘇人民出版社、1990）

——『胡愈之文集』（北京三聯書店、1996）

胡耐秋『韜奮の流亡生活』（北京三聯書店、1979）

彭垂新主編『中共中央南方局的文化工作』（中共党史出版社、2009）

『生活書店史稿』編集委員会『生活書店史稿』（三聯出版社、2007）

鄒韜奮『韜奮全集』（上海人民出版社、1995）

言語文化論集 第XXXVII卷 第1号

鄒嘉驪『韜奮年譜（上、中、下）』（上海文芸出版社、2005）

朱順佐・金普森『胡愈之伝』（杭州大学出版社、1991）

<英語>

Stranahan, Patricia. *Underground: The Shanghai Communist Party and the Politics of Survival, 1927-1937*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 1998.

付記：

本稿は2012年3月2日に京都大学人文科学研究所・現代中国研究センターにおいて開催された「現代中国文化の深層構造」共同研究班で口頭発表した内容に大幅に加筆したものである。当日、コメントーターの中村元哉先生（津田塾大学）、研究班長の石川禎浩先生（京都大学）をはじめ、会場で質問やコメントをして頂いた方々に感謝したい。